

(様式2)

「秋田大学学生海外短期研修支援事業」実施報告書（参加学生）

平成2011年10月4日

所属：教育文化学部国際言語文化課程国際コミュニケーション専修 学年 2

氏名：菊池友希子

研修先大学・機関名等（国）：フライブルク大学（ドイツ）

在籍身分：短期留学生

渡航年月日：2011年8月6日

帰国年月日：2011年9月3日

○研修先での学習内容等

プログラム開始初日にプレイズメント・テストを行い、習熟度別に10にクラス分け、のちに授業開始。テストの内容は、秋田大学でいう「入門ドイツ語」「基本ドイツ語」とほぼ同程度か。私自身はクラスA（最優秀クラス）に所属となったが、他のメンバーもほぼ2年生以上だった。

クラスA担当教官が日本語を話せなかったこともあり、講義はほぼドイツ語（ときおり英語）で行われた。講義は午前9時から12時までの3時間。午後は、日によってはドイツ文化などについての講義があったり、レクリエーションプログラムがあったり、ひとそれぞれに過ごしていた。

レクリエーションプログラムの例としては、フライブルク近郊への小旅行、ワイン農家の見学および試飲会、チューター宅での料理教室などがあった。

○研修期間の生活面について

大学から路面電車で5駅離れた位置にある寮で生活した。通学所要時間は20分程度。

キッチン（およびリビング）洗面所・トイレが共同、寝室（机・タンス・本棚・洗面台つき）が個人用、というタイプの部屋が割り当てられた。どの寮、どの建物に入るかで、設備はまちまちだったらしい。

名目上は「共同生活」だが、生活時間が合わず、同じ寮生と過ごすことはあまりなかった。

午後が空いている日が多かったため、しばしば大学周辺を散策して過ごした。

私の場合、特に書店に入り浸った。ストラスブールやミュンヘンへの小旅行でまで書店を探しに走ったのは、おそらく私くらいだと思う。

食事は、昼は学食で、夜は気分と状況に応じて外食あるいは自炊していた。幸運なことに寮のキッチンがかなり充実していたので、材料さえ買ってくれば、自炊するのに不都合はなかった。

(様式 2)

全体に物価は安いのだが、レクリエーションの参加費などで予想外に出費していたため、特に後半は自炊を心がけるようになった。

○研修期間全般にわたる感想

大学以外での現地人との会話は、実のところ英語が多かった。こちらの容姿がアジア人なので、ドイツ語より英語のほうが通じると思われたのだろう。しかし、どちらの方が理解しやすいかは、状況により異なった。

私の場合、ちょっとややこしい内容を表現するには、やはり英語の方が楽ではある。反面、例えばスーパーやレストランなどで交わすような日常会話表現は、ドイツ語でないと言えなかった。

結局一番多かったのは、ドイツ語と英語が混ざった会話だったように思う。言える部分はドイツ語で、表現が判らなくなったら部分的に英語、というひどい構文を、ほとんどのひとが受け止めてくれた。もっと語彙さえあれば全てドイツ語で言えたのに、と悔しく思う場面も少なくなかった。

特に役立った表現は“Wie sagt man das (auf Deutsch)?”「これは(ドイツ語で)何て言うの？」だと思う。自分で訊くのはもちろん、たまに向こうからぶつけられることもあった。中国人と勘違いされて話しかけられたことが幾度かあったが、日本人だと答えたところ、「じゃあ日本語で“Hallo”って何て言うの？」と返される場面が一度ならずあった。

この意味で特に印象に残っているのは、チューター宅で出会ったスペイン人学生との会話だ。互いに母語の単語をいくつか教え合ったのだが、その媒介言語がドイツ語だという事実が、ひどく新鮮に感じられた。同時に、日本で教育を受けるうちに、他国人との媒介言語＝英語という認識が染みついていたのだと思い知った。

○今後の勉強計画

書籍を20冊余り購入してきたので、大学の授業の傍ら、それらを読み進めていこうと考えている。特に『日本語からドイツ語に翻訳されたもの』を重点的に選んだので、見比べながら語彙や表現の知識を増やせればと思う。

フライブルク大学で同時期に開催していたプログラムに、出身地を問わずドイツ語学習者が集まるものがあったと後から知った。あわよくば来年度はこちらに参加できればとも考えている。

(様式 2)

